

日本における仏教考古学の研究現状と課題

清水昭博 || 日本帝塚山大学

1. はじめに

本論の目的は日本における仏教考古学の研究の現状と課題を把握することにある。そこで、まずこれまでにおこなわれてきた仏教考古学の研究史の概略を述べ、研究史的に日本の仏教考古学が対象としてきた文物の研究動向から現況を把握し、今後の課題を見究めたいと思う。

2. 仏教考古學研究略史

日本における仏教考古学の萌芽は18世紀後半の江戸時代に始まる。例えば、藤貞幹が『古瓦譜』(安永五年)に120例におよぶ古瓦の拓本を収録したように、すでに江戸時代にはその後の仏教考古学が対象とする文物の研究がおこなわれていたことがわかる。近代学問としての日本の考古学は、こうした江戸時代の考証学を取りこみながら明治時代に始まる。「考古学は過去人類の物質的遺物(に據り人類の過去)を研究するの学なり」(『通論考古學』、1922年)と考古学を定義し、日本の近代考古学の基礎を築いた浜田耕作は、同じ書のなかで「基督教考古学の成立と同じく、其の特殊の遺跡

遺物に富める「仏教考古学」の成立を認ぶ可く、吾人は此の名称の使用を従へんと欲す」と、早くも仏教考古学を提唱する言及をおこなっていることには注目すべきである。

その後、仏教考古学が体系化される以前の時期にも仏教関係の遺跡・遺物の調査研究はおこなわれていた。浜田耕作『豊後磨崖石仏の研究』(1925年)、服部清五郎『板碑解説』(1928年)、石田茂作『飛鳥時代寺院址の研究』(1936年)、石田茂作・矢島恭介『金峯山経塚遺物の研究』(1937年)、角田文衛編『国分寺の研究』(1938年)、坪井良平『慶長末年以前の梵鐘』(1939年)などである。

そうしたなかで最初に仏教考古学を冠して編集された講座本は『佛教考古學講座』である。同書は、1936年(昭和11)から1938年(昭和12)にかけて考古学の柴田常恵らを編集顧問として編まれた。そのなかで「佛教考古學概論(一)」を著した柴田は「仏教考古学なる名称は、未だ世人の耳に熟せざる所たるべきも、仏教の遺跡遺物に依る研究は既に基督考古学が欧米に於て存在する程とて其内容の遙に豊富なる仏教に此事あるべき」として仏教考古学の用語を推奨したのは、先の浜田の提言を受けた発言であった。また、「研究の対象が同一の事物であつても、其立場を異にすれば何等の差支はない筈である」とした点は同書の編集方針にも反映されている。

したがって、『佛教考古學講座』の名称ではあるが、その内容は建築史・考古学・仏教学・美術史に加え、仏教行事・作法・教育・文学など多岐にわたり、今日にいうところの考古学に限定した内容ではなかつた。なお、柴田が「仏教の全体に亘る遺跡遺物を網羅し、此等の間に孤立の状態にある知識を連絡せしめ得る」ことに仏教考古学の存在意義を見出した点は、今日の学際研究にも通じる見解といえよう。

1941年(昭和16)に編集された『佛教考古學論叢』(東京考古学会)

は『考古学評論』第3集として編まれた論文集であった。そのなかで編集を担当した坪井良平は、仏教考古学は仏教史や仏教美術では定め得ないような、日本の生活のなかに深く浸潤した文化現象を理解するために考古学的研究が可能なことを説いている。この「生活のなかに深く浸潤した文化現象」を理解するために仏教考古学が存在するという考えは文化史的発想であり、6編で編まれた論文集のなかに古瓦に関する論文が3編もあることは、瓦研究が主流となった今日の仏教考古学の系譜をうかがううえで特筆できる。

仏教考古学研究を大きく開拓し、推し進めた石田茂作は、仏教考古学を「仏教関係の遺跡遺物を対象とする考古学」と定義し、その目的を過去の仏教を知ることとした(『日本考古学辞典』1962年)。1975年(昭和50)から1977年(昭和52)には石田の監修のもとで『新版仏教考古学講座』が編まれている。先の柴田らによる『仏教考古学講座』の続編ともいべき講座本であるが、その内容はより体系化したものとなっている。寺院、塔・塔婆、仏像、仏具、経典・経塚、墳墓の六項目を柱としたその内容は、石田の仏教考古学の研究対象をよく示しているといえよう。また、その後、石田は『佛教考古学論攷』(1977~1978年)で自身の仏教考古学の体系化をおこなっている。

日本の仏教考古学の萌芽は仏教関連の遺物に関心を抱いた江戸時代に遡るが、考古学という学問上で実質的に体系化されたのは石田茂作らの研究によるものといえよう。その他の仏教考古学に関する著作としては、久保常晴の『佛教考古学研究』(1967年)・『続佛教考古学研究』(1977年)・『続々佛教考古学研究』(1983年)、坂詰秀一『仏教考古学調査法』(1978年)、石村喜英『佛教考古学研究』(1993年)、齋藤忠『仏教考古学と文字資料』(1997年)、網干善教『佛教考古学研究』(2000年)、坂詰秀一『仏教考古学の構想 その視点と展開』(2000年)、坂詰秀一編『仏教考古学事典』(2003年)などがある。これらのな

かには網干のように伝世品を考古学の対象としないという姿勢もあるが、今日まで石田の仏教考古学の定義を大きく逸脱する見解はない。

3. 仏教考古学の対象と寺院跡の発掘調査

石田茂作による『新版仏教考古学講座』の構成は、寺院、塔・塔婆、仏像、仏具、経典・経塚、墳墓の六項目で、寺院は寺院跡・瓦博・鎮壇具・その他(建築用材・金鐸・飾り金具・荘厳具・博仏・塑像)、塔・塔婆は木造塔・石塔・舍利とその容器・瓦塔・小塔・板碑・庶民信仰・位牌、仏像は仏像・仏像図像学・高僧像・禅宗系美術・垂迹系美術・仏伝文学と仏教世界観の造形的表現・胎内納入物・仏足石・種子、仏具は仏具・修験道用具・鎌倉新仏教各宗仏具、経典は経典・経塚・信仰と経典・経塚分布・如法経と経塚・経塚遺物年表、墳墓は火葬墓・墓地と火葬墓・墓碑墓誌・墳墓堂に細分される。

しかし、同書に掲げられたこれらの項目は、例えば、仏像や仏具の研究が仏教彫刻史や工芸史の研究者により深化されているように、現状としては考古学研究者が携わることが少ない分野も多い。そうしたなかで考古学研究者が最も多く関わってきたのが発掘調査をともなう寺院跡とその遺構やそこから出土した遺物の研究であったことは間違いない。

寺院跡の発掘調査は戦前にもおこなわれる機会があったが、少数かつ小規模なものであった。寺院跡の本格的な調査が実施されるようになったのは昭和20、30年代(1940、50年代)以降のことである。この時期、奈良の法輪寺・定林寺跡・橘寺や大阪・四天王寺、静岡・遠江国分寺跡、島根・出雲国分寺跡、宮城・陸奥国分寺跡、東京・武蔵国分寺跡など各地の国分寺跡の調査がおこなわれている。また、昭和31・32年(196

6・67)に奈良・飛鳥寺、昭和32・33年(1967・68)の奈良・川原寺跡でおこなわれた全面発掘の方法は、その後の寺院跡の発掘調査の指針ともなった。

戦後の高度経済成長期(1954～73年)以降の全国の発掘調査の契機になったのは、ほとんどが住宅・学校・工場・道路・鉄道路線などの開発に伴う緊急調査であった。1983年(昭和58)に刊行された『飛鳥白鳳寺院文献目録』(奈良国立文化財研究所埋蔵文化財ニュース40号)には、「飛鳥白鳳」寺院及び瓦窯など全国730か所の遺跡が掲載されている。これらのなかには瓦を出土する寺院以外の遺跡である官衙遺跡なども含まれるが、1980年代までに相当な数の寺院跡が確認されていたことを理解することができよう。また、そうしたなかで寺院跡の調査範囲も伽藍中心部の調査から寺域周辺部へと広がる傾向にあったといえ、そうした状況のなかで寺院跡の多様な遺構・遺物が検出され、調査研究の対象となったものといえる。

4. 仏教考古学研究的現状

先に述べたように膨大な数の調査により判明した寺院跡の調査成果にもとづく研究のあり様は日本の仏教考古学の現状を反映しているといえよう。2013年(平成25)、文化庁文化財部記念物課によって発行された『発掘調査のてびきー各種遺跡調査編ー』は「寺院の調査」にその一章を費しており、そこに記された項目によって、主に寺院跡を対象として進められてきた仏教考古学研究が明らかにした遺跡・遺構・遺物の内容とその関心の方向性を知ることができるだろう。やや長くなるが以下に引用する。

『発掘調査のてびき－各種遺跡調査編－』文化庁文化財部記念物課編、
2013年

第三章 寺院の調査

第1節 寺院概説

1 古代寺院

- A 伽藍配置の変遷：初期寺院の伽藍配置・官寺の伽藍配置・多様な伽藍配置
 - B 古代寺院の空間構成：古代寺院の構成・附属院地の調査
 - C 寺院の展開：集落内寺院・神宮寺・山林寺院・浄土教寺院と臨池伽藍・寺院と邸宅
- 2 中世寺院：中世寺院の初届調査・中世寺院の成立・広大な領域・近世寺院

第2節 発掘調査の準備と計画

1 寺院の特徴：特徴の把握・適切な判断と対処

- A 古代寺院の特徴：建物の配置と構成・建物の基礎構造と規模・遺物の特徴・その他の特徴・性格の総合的判断
 - B 中世寺院の特徴：遺構と立地の特徴・遺物の特徴
- 2 遺跡情報の事前収集
- A 地表観察：遺構の痕跡・遺物・地形
 - B 地図・空中写真の利用：地形図・空中写真
 - C 史料・絵画資料・地名などの利用：史料・絵画資料・地名
 - D 仏像・民俗調査：仏像・民俗調査
 - E 物理調査：探査の方法・探査の事例
- 3 試掘・確認調査による把握：主要堂塔の確認・中軸線の把握
- 4 測量と地区割り：測量精度・地形測量・地区割り
- 5 調査計画の策定：調査の目的・調査計画・調査計画の柔軟な見直し

第3節 寺院の建築構造

- 1 金堂・講堂・本堂：講堂・講堂・別院の堂・平安時代の堂・本堂
- 2 塔：塔の種類・塔の構造・多宝塔の構造
- 3 門：門の形式・門の種類
- 4 回廊と僧坊：回廊・僧坊(尼坊)
- 5 その他の堂：経楼・鐘楼・その他の建造物

第4節 寺院遺構の諸要素

1 礎石建物

- A 礎石とそれにとまう遺構：礎石建物とは・礎石の種類・心礎・礎石の据えつけ・礎石・根巻粘土・礎石抜取穴・落とし込み穴

- B 建物の基礎事業と基壇：掘込地業・総地業・壺地業・布地業・版築・基壇

- C 基壇外装：切石積基壇・乱石積基壇・瓦積基壇・磚積基壇・木製基壇・亀腹・基壇外装の痕跡・基壇上面の舗装

- #### 2 掘立柱建物：付属院地の掘立柱建物・掘立柱から礎石建ちへの建て替え

- #### 3 建物にとまう遺構：整地・舗装・暗渠・地覆・間柱・階段・足場穴・雨落溝・雨垂れ痕跡・須弥壇・礼拝石・その他

4 区画施設

- A 掘立柱塀・柵：掘立柱塀とは・構造と種類・柵

- B 築地塀・土塀：構造と種類・版築・堰板・添柱・寄柱・屋根・雨落溝・規模・掘立柱塀から築地塀へ

- C 溝：機能と種類・区画溝

- #### 5 付属施設：幢幡・灯笼・参道

第5節 発掘方法と留意点

- 1 礎石建物の発掘：礎石にともなう遺構の発掘・基壇の発掘・基壇の断ち割り調査・塔基壇の発掘
- 2 建物構成の確認：主要堂塔の解明・中門回廊の確認・区画施設の確認・寺院関連生産遺構の調査・山林寺院の調査
- 3 瓦の分布と記録：瓦分布が示すもの・総序的把握の重要性・保存目的調査での瓦の取り上げ

第6節 遺物の整理

1 瓦埴

- A 瓦の種類：丸瓦・平瓦・軒丸瓦・軒平瓦・隅切瓦・熨斗瓦・面戸瓦・雁振瓦・鬼瓦・鳥龕・鷗尾・垂木先瓦・隅木蓋瓦など
- B 瓦の観察と記録：丸瓦の観察視点・平瓦の観察視点・軒丸瓦の観察視点・軒平瓦の観察視点・瓦当部の観察視点・中近世瓦の整理・拓本・実測・写真・瓦の数量的把握
- C 屋根の構造と瓦の葺き方：屋根形式と瓦・屋根瓦の葺き方
- D 埴の観察と記録：埴とは・埴の使用例・整理上の留意点
- 2 土器：仏具の種類・奈良三彩・灯火器・漆付着土器・硯・寺院地各所の土器様相
- 3 仏像・仏具など：塑像・塑像以外の仏像・仏具・青銅製品の整理
- 4 その他の遺物：瓦塔・木製小塔・金属製品・建築部材・文字資料

第7節 調査成果の検討

- 1 遺構の検討：堂塔の性格と伽藍配置の把握・多様な形態の地方寺院・堂塔の建立順序の把握

- 2 遺物の検討：創建軒瓦の抽出・軒瓦の組み合わせ・瓦からみた創建順序・瓦の年代と土器の年代・文字瓦と墨書土器
- 3 調査成果の総合的検討：寺院の性格の把握・軒瓦の同範関係の把握・僧寺と尼寺・寺院と瓦葺・地域の中の寺院

5. 最後に－仏教考古学の課題－

石田茂作による『新版仏教考古学講座』と前章でみた『発掘調査のてびき－各種遺跡調査編－』に取り上げられた項目には大きく異なる点がある。それは後者の扱う資料のほとんどが寺院跡の発掘調査で検出された遺構・遺物を取り上げていることである。この点は、日本における今日の仏教考古学的研究は戦後の開発にともなう発掘調査により判明した成果をもとに進められてきた状況を反映しているのであろう。そこから得られた成果から考古学的に歴史を復元し、文化、社会、経済、政治史に言及できる研究成果も多いが、仏教史に還元できる研究は意外に少ない。石田茂作が仏教考古学を「仏教関係の遺跡遺物を対象とする考古学」と定義し、その目的とした「過去の仏教を知る」ためには寺院跡に遺存した情報のみでは事欠くであろう。出土品のみならず、伝世品を含めた仏教関連文物を仏教史的に位置づける多角的な学際的研究が今こそ望まれる。

參考文獻

- 浜田耕作 1922 『通論考古學』 大鏡閣
- 浜田耕作 1925 『豊後磨崖石仏の研究』 京都帝国大学
- 服部清五郎 1928 『板碑解説』 鳳名書院
- 石田茂作 1936 『飛鳥時代寺院址の研究』 聖徳太子奉讃会
- 柴田常恵他 1936~1938 『佛教考古學講座』 全15巻、雄山閣
- 石田茂作・矢島恭介 1937 『金峯山経塚遺物の研究』 帝室博物館
- 角田文衛編 1938 『国分寺の研究』 考古学研究会
- 坪井良平 1939 『慶長末年以前の梵鐘』 東京考古学会
- 坪井良平編 1941 『佛教考古學論叢』 (『考古学評論』 第3集) 東京考古学会
- 日本考古学協会編 1962 『日本考古学辞典』 日本考古学協会
- 久保常晴 1967 『佛教考古學研究』 ニューサイエンス社
- 石田茂作監修 1975~1977 『新版仏教考古学講座』 全7巻、雄山閣出版
- 石田茂作 1977・1978 『佛教考古學論叢』 全6巻、思文閣出版
- 久保常晴 1977 『続佛教考古學研究』 ニューサイエンス社
- 坂詰秀一 1978 『仏教考古学調査法』 ニューサイエンス社
- 久保常晴 1983 『続々佛教考古學研究』 ニューサイエンス社
- 奈良国立文化財研究所理蔵文化財センター編 1983 『飛鳥白鳳寺院文献目録』 (奈良国立文化財研究所理蔵文化財ニュース40号)、奈良国立文化財研究所理蔵文化財センター
- 石村喜英 1993 『佛教考古学研究』 雄山閣出版
- 齋藤忠 1997 『仏教考古学と文字資料』 (齋藤忠著作選集5)、雄山閣出版
- 網干善教 2000 『佛教考古学研究』 角川書店
- 坂詰秀一 2000 『仏教考古学の構想 その視点と展開』 雄山閣出版
- 坂詰秀一編 2003 『仏教考古学事典』 雄山閣出版
- 文化庁文化財部記念物課 2013 『発掘調査のてびき - 各種遺跡調査編 - 』

Abstract

The current state of research regarding Buddhist archaeology in Japan

Shimizu Akihiro || Tezukayama University

This study examines the historiography of Buddhist archaeology, with particular emphasis on understanding the current state of research and challenges associated with Buddhist archaeology in Japan.

Among the various publications on Buddhist archaeology, Shinpan bukkyō kōkōgaku kōza, a comprehensive study of Buddhist archaeology in Japan authored by Ishida Mosaku, and Hakkutsu chōsa no tebiki: kakushu iseki chōsa hen, recently published by the Agency for Cultural Affairs, differ markedly in subject matter.

One point of departure: the latter publication predominantly focuses on materials excavated during formal surveys of Buddhist temple sites, consisting of architectural remains and objects.

The current state of research in the field of Buddhist archaeology in Japan is believed to reflect scholarly achievements enabled by excavations conducted during the postwar period of reconstruction and land development.

Such advances have allowed scholars to reconstruct historical developments through the interpretation of archaeological results, especially in the fields of cultural, social, economic, and political histories. However, in terms of elucidating the history of Buddhist doctrine, it appears that research in this field has been unexpectedly limited.

As indicated by Ishida Mosaku, Buddhist archaeology is “archaeology that

focuses on Buddhist architectural remains and relics,” and to realize the essential goal of “understanding Buddhism of the past,” it is not sufficient to consider only the material evidence unearthed from Buddhist temple sites.

Instead of investigating just the excavated remains, it is especially critical today that Buddhist materials stored aboveground in temple collections are also examined as part of a multidisciplinary approach towards expanding our knowledge of Buddhist doctrinal history.

일본 불교고고학의 연구현황과 과제

번역 양종현 || 국립경주문화재연구소

초록

이 글은 불교고고학의 연구사를 살펴보고, 일본에 있어서 불교고고학의 연구현황과 과제에 대하여 파악해 보았다.

불교고고학과 관련한 저서 중 일본고고학을 정리한 이시다 모사쿠(石田茂作)의 『신판 불교고고학강좌』(『新版仏教考古学講座』)와 최근 문화청에서 발간한 『발굴조사의 길잡이-각종 유적조사편-』(『発掘調査のてびき-各種遺跡調査編-』)은 내용면에서 서로 다른 점이 있다.

후자의 경우 대부분의 자료가 사원유적에서 확인된 유구와 유물을 다루었다는 점이다.

이 차이점은 일본에 있어서 현재의 불교고고학이 종전 이후 개발과 함께 이루어진 발굴조사를 통해서 밝혀진 성과를 토대로 진행된 상황을 반영한 것이기 때문이라고 생각한다.

이러한 성과로부터 고고학적으로 역사를 복원하고, 문화, 사회, 경제, 정치사에 이르는 연구가 활발하게 이루어졌으나, 불교사에 환원될 만한 연구는 의외로 미약한 상황이다.

이시다 모사쿠가 정의한 바와 같이 불교고고학을 「불교관계의 유적유물을 대상으로 하는 고고학」, 또는 「과거의 불교를 알기」 위해서는 사원유적에 남아있는 정보만으로는 부족하다.

출토유물만이 아닌 전세품을 포함하여 불교관련문물을 불교사적인 위치를 찾아가는 다각적인 학제간의 연구가 전망된다.

1. 머리말

이 글의 목적은 일본에 있어서 불교고고학의 연구 현황과 과제를 파악하는 것에 있다. 이에 지금까지 이루어진 불교고고학의 연구사를 개관하고, 연구사적 측면에서 일본의 불교고고학이 대상으로 하는 문물의 연구동향으로 본 현황을 파악한 후 이후의 과제를 언급하고자 한다.

2. 불교고고학 연구 개관

일본에 있어서 불교고고학은 18세기후반 에도시대(江戸時代)에 시작되었다. 예를 들어 토우테칸(藤貞幹)이 『고와보(古瓦譜)』(安永五年)에 120점에 이르는 옛기와(古瓦)의 탁본을 수록하였듯이 이미 에도시대에는 이후 불교고고학의 대상이 되는 문물의 연구가 이루어졌다는 것을 알 수 있다. 근대학문으로서 일본의 고고학은 이러한 에도시대의 고증학(考證學)을 받아들여 메이지시대(明治時代)에 시작되었다. 「고고학은 과거 인류의 물질적 유물을 연구하는 학문」(『통론고고학(通論考古學)』, 1992년)이라고 정의하였고, 일본 근대고고학의 기초를 구축한 하마다 코사쿠(浜田耕作)는 같은 책에 「기독교고고학의 성립과 같이 그 특수한 유적과 유물이 풍부하여 「불교고고학」의 성립을 위하여 우리는 명칭의 사용을 중용하고자 한다」고 언급을 함으로써 이른 시기에 불교고고학을 제창하였다는 사실에 주목해야할 것이다.

이후 불교고고학이 계화되기 이전 시기에도 불교관계의 유적과 유물에 대한 조사와 연구는 이루어졌다. 이에 대한 결과로는 하마다 코사쿠 『분고노쿠니마에불 연구(豊後磨崖石仏の研究)』(1925년), 하토리 세이고로(服部清五郎) 『관비해설(板碑解説)』(1928년), 이시다 모사쿠(石田茂作) 『아스카시대 사원지 연구(飛鳥時代寺院址の研究)』(1936년), 이시다 모사쿠·야

지마 초스케(石田茂作·矢島恭介) 『킨보잔경총유물 연구(金峯山經塚遺物の研究)』(1937년), 츠노다 분에이 편(角田文衛編) 『고쿠분지 연구(國分寺の研究)』(1938년), 시보이 료유헤이(坪井良平) 『경장말년이전의 범종(慶長末年以前の梵鐘)』(1939년) 등이 있다.

이러한 연구 중에 불교고고학에 관하여 편찬된 것이 『불교고고학강좌(佛敎考古學講座)』이다. 이 책은 1936년부터 1938년까지 고고학자인 시바타 조케이(柴田常惠) 등이 편집고문으로 편찬하였다. 그 중 「불교고고학개론1(佛敎考古學概論(一))」을 지은 시바타는 「불교고고학이라는 명칭은 아직 사람들의 귀에 익숙하지 않은 것임에도 불교유적과 유물에 대한 연구는 기독교고고학이 유럽과 미국에서 이루어지는 것과 같이 풍부한 불교에 차사(此事)할 것이다」라고 하여 불교고고학의 용어를 권장했던 것은 앞서 하마다의 제언을 받아들인 결과이다. 그리고 「연구 대상이 동일한 사물임에도 기왕의 입장이 다른 것을 감안하면 그다지 큰 차이도 아니다」라고 한 점은 이 책의 편집방침에도 반영되었다.

그러므로 『불교고고학강좌』로 이름지었지만, 그 내용은 건축사(建築史)·고고학(考古學)·불교학(佛敎學)·미술사(美術史)가 더해져, 불교행사(佛敎行事)·작법(作法)·교육(教育)·문학(文學) 등 여러 방면에 걸쳐 다루어졌으며, 이는 지금과 같이 고고학에 한정된 것은 아니었다. 그리고 시바타가 「불교 전체에 이르러 유적과 유물을 망라하여 차등에 의한 고립 상태에 있는 지식을 연결함」이라는 의미에서 불교고고학의 존재의의를 나타낸 점은 현재 학제연구에서도 통용되는 견해라고 할 수 있다.

1941년에 편집된 『불교고고학논총(佛敎考古學論叢)』(東京考古學會)은 『고고학평론(考古學評論)』 제3집으로 편집된 논문집이다. 이 논문집을 편집한 시보이 료유헤이는 불교고고학은 불교사와 불교미술에서는 정할 수도 없이 일본 생활 속에 깊숙이 스며있는 문화현상을 이해하기 위하여 고고학적 연구가 가능하다는 것을 설명하였다. 이 「생활 속에 깊숙이 스며

있는 문화형상」을 이해하기 위한 불교고고학이 존재한다는 생각은 문화적 발상이기도 하다. 그리고 6편으로 편찬된 논문집 중에는 옛기와에 관한 논문이 세 편이나 있어, 기와연구가 주류를 이루는 지금의 불교고고학이 이 계보를 잇는다는 점에서 강조하고 싶다.

불교고고학 연구를 적극적으로 개척하고 추진한 이시다 모사쿠는 불교고고학을 「불교관계의 유적과 유물을 대상하는 고고학」이라고 정의하고, 그 목적을 과거의 불교를 알기 위함이라고 언급하였다(『日本考古學辭典』1962). 1975년부터 1977년까지는 이시다가 감수한 『신판불교고고학 강좌(新版佛敎考古學講座)』가 출판되었다. 이전 시마타에 의한 『불교고고학강좌(佛敎考古學講座)』의 속편이 되는 강좌본이지만, 그 내용은 보다 체계화되었다. 사원(寺院), 탑(塔), 탑과(塔婆), 불상(佛像), 불구(佛具), 경전(經典), 경총(經塚), 분묘(墳墓)의 여섯 개 항목을 기본으로 하는 내용은 이시다의 불교고고학 연구대상을 잘 보여주는 것이라고 할 수 있다. 이후 이시다는 『불교고고학논고(佛敎考古學論攷)』(1977~1978)에 자신의 불교고고학의 체계화를 반영하였다.

일본 불교고고학의 시작은 불교관련 유물에 관심을 갖게 된 에도시대로 거슬러 올라가며, 고고학이라는 학문에서 실질적으로 체계화를 이룬 것은 이시다 모사쿠의 연구에 의한 것이라고 하겠다. 그 밖에 불교고고학에 관한 저서로는 쿠보 시네히루(久保常晴)의 『불교고고학 연구(佛敎考古學研究)』(1967년)·『속 불교고고학 연구(續佛敎考古學研究)』(1977년)·『속속 불교고고학 연구(續々佛敎考古學研究)』(1983년), 사카즈메 히데이치(坂詰秀一) 『불교고고학조사법(佛敎考古學調査法)』(1978년), 이시무라 키에이(石村喜英) 『불교고고학 연구(佛敎考古學研究)』(1993년), 사이토 타다시(齋藤忠) 『불교고고학과 문자자료(佛敎考古學と文字資料)』(1997년), 아보시 요시노리(網干善教) 『불교고고학 연구(佛敎考古學研究)』(2000년), 사카즈케 히데이치 『불교고고학의 구상 그 시점과 전개(佛敎考古學の構想その視点と

展開』(2000년), 사카즈메 히데이치 편(坂詰秀一編) 『불교고고학사전(仏教考古學事典)』(2003년) 등이 있다. 이 중에서는 아보시와 같이 전세품(轉世品)을 고고학의 대상으로 하지 않는 자세를 보이는 경우도 있으나, 현재에는 이시다가 불교고고학을 정의한 한 것에 크게 벗어나지 않는다.

3. 불교고고학의 대상과 사원유적의 발굴

이시다 모사쿠에 의한 『신관 불교고고학강좌』의 구성은 사원, 탑, 탑파, 불상, 불구, 경전, 경총, 분묘의 여섯 개 항목으로, 사원은 사원유적·와전(瓦塼)·진단구(鎭壇具)·건축부재(建築用材)·금탁(金鐸)·장식금구(飾り金具)·장엄구(莊嚴具)·진불(眞佛)·소상(塑像), 탑·탑파는 목조탑(木造塔)·석탑(石塔)·사리와 용기(舍利, 容器)·와탑(瓦塔)·소탑(小塔)·판비(板碑)·서민신앙(庶民信仰)·위패(位牌), 불상은 불상(佛像)·불상도상학(佛像圖像學)·고승상(高僧像)·선종계 미술(禪宗系美術)·수적계 미술(垂迹系美術)·불전문학(佛傳文學)과 불교세계관의 조형적 표현·태내납입물(胎內納入物)·불족적(佛足石)·종자(種子), 불구는 불구(佛具)·수험도용구(修驗道用具)·카마쿠라 신불교 각종불구(鎌倉新佛教各宗佛具), 경전은 경전(經典)·경총(經塚)·신앙과 경전·경총분포(經塚分布)·여법경(如法經)과 경총·경총유물연표(經塚遺物年表), 분묘는 화장묘(火葬墓)·묘지(墓地)와 화장묘·묘비묘지(墓碑墓誌)·분묘당(墳墓堂)으로 세분된다.

그러나 이 책에 제시한 항목은 예를 들면 불상과 불구의 연구가 불교 조각사(佛敎彫刻史)와 공예사(工藝史)의 연구자에 의한 심화된 것과 같이 현상으로서의 고고학 연구자가 다가가기에 어려운 분야가 많다. 이러한 상황 가운데 고고학자가 가장 많이 관여하는 발굴조사와 더불어 사원유적과 유구에서 출토된 유물을 연구하는 것은 자연스러운 일이다.

사원유적의 발굴조사는 종전 이전에 실시될 기회가 있었으나, 소수에 걸쳐 작은 규모로 이루어졌다. 사원유적의 본격적인 조사가 실시된 것은 1940~50년대 이후이다. 이 시기 나라(奈良)의 호린지(法輪寺)·조린지터(定林寺跡)·타치마나데라(橘寺), 그리고 오사카(大阪)·시텐노지(四天王寺), 시즈오카(静岡)·도토미고쿠분지터(遠江國分寺跡), 시마네(島根)·시즈모고쿠분지터(出雲國分寺跡), 미야기(宮城)·무츠고쿠분지터(陸奥國分寺跡), 도쿄(東京)·무사시노고쿠분지터(武藏國分寺跡) 등 각지의 고쿠분지터 조사가 이루어졌다. 그리고 1966과 67년에 나라·아스카데라(飛鳥寺), 1967년과 68년에 카와하라데라터(川原寺跡)에서 실시된 전면발굴의 방법은 이후 사원유적의 발굴조사의 지침이 되었다.

종전 이후의 고도경제화성장기(1954~73년) 이후 전국의 발굴조사의 계기가 된 것은 대부분 주택·학교·공장·도로·철도 등의 개발에 의한 긴급발굴이었다. 1983년 간행된 『아스카 하쿠오 사원문헌 목록(飛鳥白鳳寺院文獻目錄)』(나라국립문화재연구소 매장문화재 뉴스 40호)에는 「아스카 하쿠오(飛鳥白鳳)」 사원과 기와가마 등 전국 730개소의 유적을 수록하였다. 이들 중에는 기와가 출토된 사원 이외의 유적인 관아유적(官衙遺跡) 등도 포함되어 있으나, 1980년대까지는 상당한 수의 사원유적이 확인되었다는 것을 알 수 있다. 그리고 사원유적의 발굴범위도 가람중심부의 조사에서 사역주변부로 넓혀진 경향이 있으며, 이러한 상황에서 사원유적의 다양한 유구와 유물이 출토되어 조사연구의 대상이 되었다.

4. 불교고고학연구의 현상

앞서 언급하였듯이 방대한 양의 조사로부터 밝혀진 사원유적의 조사성과에 근거하는 연구는 일본의 불교고고학의 현상을 반영한 것이다. 2013

년에는 문화청 문화재부 기념물과(文化廳文化財部記念物課)에 의하여 발행된 『발굴조사의 길잡이—각종 유적조사편—』은 「사원조사」에 대하여 한 장을 할애하였으며, 이 항목에 의해 주로 사원을 대상으로 진행된 불교고고학이 밝힌 유적과 유구, 그리고 유물의 내용에 관심을 갖는 방향성을 알 수 있게 한다. 그 내용은 아래와 같다.

『발굴조사의 길잡이—각종 유적조사편—』 문화청 문화재부 기념물과편, 2013년

제Ⅲ장 사원의 조사

제1 절 사원 개설

1. 고대사원

- A 가람배치의 변천 : 초기사원의 가람배치 · 국가 사찰(官寺)의 가람배치 · 다양한 가람배치
 - B 고대사원의 공간구성 : 고대사원의 구성 · 부속원지(附屬院地)의 조사
 - C 사원의 전개 : 집락내 사원(集落內寺院) · 신궁사(神宮寺) · 산림사원(山林寺院) · 정토교사원(淨土敎寺院)과 임지가람(臨池伽藍) · 사원과 저택(邸宅)
2. 중세사원 : 중세사원의 초굴조사(初屈調査) · 중세사원의 성립 · 광대한 영역 · 근세사원

제2 절 발굴조사의 준비와 계획

1. 사원의 특징 : 특징의 파악 · 적절한 판단과 대처

- A 고대사원의 특징 : 건물의 배치와 구성 · 건물의 기초구조와 규모 · 유물의 특징 · 그 밖의 특징 · 성격의 종합적 판단
- B 중세사원의 특징 : 유구와 입지의 특징 · 유물의 특징

2. 유적정보의 사전수집

- A 지표관찰 : 유구의 흔적 · 유물 · 지형
 - B 지도 · 항공사진의 이용 : 지형도 · 항공사진
 - C 사료 · 회화자료 · 지명 등의 이용 : 사료 · 회화자료 · 지명
 - D 불상 · 민속조사 : 불상 · 민속조사
 - E 물리조사 : 탐사방법 · 탐사사례
3. 시굴 · 확인조사에 의한 파악 : 주요당탑의 확인 · 중축선의 파악
4. 측량과 지구분할 : 측량정도 · 지형측량 · 지구분할
5. 조사계획의 책정 : 조사의 목적 · 조사계획 · 조사계획의 유연한 관찰

제3절 사원의 건축구조

- 1. 금당 · 강당 · 본당 : 강당 · 별원(別院)의 당 · 헤이안시대(平安時代)의 당 · 본당
- 2. 탑 : 탑의 종류 · 탑의 구조 · 다보탑의 구조
- 3. 문 : 문의 형식 · 문의 종류
- 4. 회랑과 승방 : 회랑 · 승방(니방, 尼坊)
- 5. 그 밖의 당 : 경루 · 종루 · 기타 건조물

제4절 사원유구의 제요소

- 1. 초석건물
 - A 초석과 이를 기초로 하는 유구 : 초석건물 · 초석의 종류 · 심초 · 초석을 설치한 · 초석 · 근권점토(根卷粘土) · 초석발수혈(礎石拔取穴) · 수혈
 - B 건물의 기초사업과 기단 : 굴립지업(掘込地業) · 총지업(總地業) · 호지업(壺地業) · 포지업(布地業) · 판축(版築) · 기단
 - C 기단외장 : 절석적기단(切石積基壇) · 난석적기단(亂石積基壇) · 외적기단(瓦積基壇) · 전적기단(磚積基壇) · 목제기단 · 구복(龜腹) · 기단 · 외장의 흔적 · 기단상면의 포장(鋪裝)

2. 굴립주건물 : 부속원지의 굴립주건물 · 굴립주에서 초석건물로의 변화

3. 건물에 공반하는 유구 : 정지(整地) · 포장 · 암거(暗渠) · 지복(地覆) · 간주(間柱) · 계단 · 족장혈(足場穴) · 낙수구(雨落溝) · 낙수흔적 · 수미단(須弥壇) · 예배석(礼拜石) · 기타

4. 구획시설

A 굴립주담 · 울타리(柵) : 굴립주담 · 구조와 종류 · 울타리

B 축지담(築地塀) · 토담(土塹) : 구조와 종류 · 관축 · 언판(堰板) · 첨주(添柱) · 기주(寄柱) · 지붕(屋根) · 낙수구 · 규모 · 굴립주담에서 축지담으로

C 구 : 기능과 종류 · 구획구

5. 부속시설 : 당번(幢幡) · 정롱(燈籠) · 참도(參道)

제 5 절 발굴방법과 류의점

1. 초석건물의 발굴 : 초석과 공반되는 유구의 발굴 · 기단의 발굴 · 기단으로 구획된 조사 · 탑기단의 발굴
2. 건물구성의 확인 : 주요당담의 해명 · 중문회랑의 확인 · 구획시설의 확인 · 사원관련생산유구의 조사 · 산림사원의 조사
3. 기와의 분포와 기록 : 기와분포의 시사 · 종합적 파악의 중요성 · 보존을 목적으로 하는 조사에서 기와의 이해

제 6 절 유물의 정리

1. 와전

A 기와종류 : 수키와 · 암키와 · 수막새 · 암막새 · 모서리기와 · 마루기 와(熨斗瓦) · 착고(面戶瓦) · 마루기와(雁振瓦) · 귀면와(鬼瓦) · 마루 끝장식기와(鳥龕) · 치미(鷓尾) · 연목와(垂木先瓦) · 부연와(隅木蓋瓦) 등

B 기와의 관찰과 기록 : 수키와의 관찰시점 · 암키와의 관찰시점 · 수

막새의 관찰시점 · 암막새의 관찰시점 · 막새부의 관찰시점 · 증근
세기와와의 정리 · 탁본 · 실측 · 사진 · 기와의 수량적 파악

C 지붕 구조와 기와를 설치하는 방법 : 지붕형식과 기와 · 기와의 설
치방법

D 전의 관찰과 기록 : 전이란 · 전의 사용 사례 · 정리시 유의점

2. 토기 : 불구(不具)의 종류 · 나라삼채(奈良三彩) · 등화기(燈火器) ·
칠부착토기(漆附着土器) · 벼루(硯) · 사원지의 토기양상
3. 불상 · 불구 등 : 소상(塑像) · 소상 이외의 불상 · 불구 · 청동제품
의 정리
4. 그 밖의 유물 : 와탑(瓦塔) · 목제소탑(木製小塔) · 금속제품 · 건축
부재 · 문자자료

제 7 절 조사성과의 검토

1. 유구의 검토 : 당탑의 성격과 가람배치의 파악 · 다양한 형태의
지방사원 · 당탑의 건립순서의 파악
2. 유물의 검토 : 창건막새의 추출 · 막새의 조합 · 기와로 본 창건순
서 · 기와편년과 토기년대 · 문자기와와 묵서토기(墨書土器)
3. 조사성과의 종합적 검토 : 사원 성격의 · 막새의 동범관계(同範
關係)파악 · 승사(僧寺)와 니사(尼寺) · 사원과 와즙(瓦葺) · 지역의
사원

5. 맺음말—불교고고학의 과제—

이시다 모사쿠에 의해 『신관 불교고고학강좌』 과 전장에서 살펴 본 『발굴조사의 길잡이—각종 유적조사편—』 의 항목에는 큰 차이점이 있다. 이는 후자에서 얻은 자료는 대부분 사원유적의 발굴조사를 통하여 검출된 유구와 유물을 다루었다는 점이다. 이러한 사실은 일본에 있어서 현재 불교고고학적 연구는 종전 이후의 개발과 더불어 발굴조사에 의해 판명된 성과를 반영한 것이다. 이에 얻게 된 성과로부터 고고학적으로 역사를 복원하고, 문화, 사회, 경제, 정치사에 언급할 수 있는 연구성과가 많으나, 불교사의 환원이 가능한 연구는 의외로 많지 않다. 이시다 모사쿠가 불교고고학을 「불교관계의 유적과 유물을 대상으로 하는 고고학」 이라고 정의하고 그 목적이 「과거의 불교를 알기」 이기 때문에 이를 위해서는 사원유적에 남아 있는 정보만으로는 부족하다. 출토된 유물만이 아닌 전세품을 포함한 불교관련 문물을 불교사적인 위치에 놓아 다각적인 학술적 연구가 지금이기에 필요하다.

영문 요약은 캘리포니아대학 시라이요코(白井陽子)선생이 도와주었다. 이에 지면을 빌려 감사의 마음을 전한다.

參考文獻

- 浜田耕作 1922^{『通論考古學』大鏡閣}
- 浜田耕作 1925^{『豊後磨崖石仏の研究』京都帝國大學}
- 服部清五郎 1928^{『板碑解説』鳳名書院}
- 石田茂作 1936^{『飛鳥時代寺院址の研究』聖德太子奉讀會}
- 柴田常恵他 1936~1938^{『佛教考古學講座』全15巻、雄山閣}
- 石田茂作・矢島恭介 1937^{『金峯山經塚遺物の研究』帝室博物館}
- 角田文衛編 1938^{『國分寺の研究』考古學研究会}
- 坪井良平 1939^{『慶長末年以前の梵鐘』東京考古學會}
- 坪井良平編 1941^{『佛教考古學論叢』(『考古學評論』第3集)東京考古學會}
- 日本考古學協會編 1962^{『日本考古學辭典』日本考古學協會}
- 久保常晴 1967^{『佛教考古學研究』ニューサイエンス社}
- 石田茂作監修 1975~1977^{『新版仏教考古學講座』全7巻、雄山閣出版}
- 石田茂作 1977・1978^{『佛教考古學論攷』全6巻、思文閣出版}
- 久保常晴 1977^{『續佛教考古學研究』ニューサイエンス社}
- 坂詰秀一 1978^{『仏教考古學調査法』ニューサイエンス社}
- 久保常晴 1983^{『續々佛教考古學研究』ニューサイエンス社}
- 奈良國立文化財研究所埋藏文化財センター編 1983^{『飛鳥白鳳寺院文獻目録』(奈良國立文化財研究所埋藏文化財ニュース40号)、奈良國立文化財研究所埋藏文化財センター}
- 石村喜英 1993^{『佛教考古學研究』雄山閣出版}
- 齋藤忠 1997^{『仏教考古學と文字資料』(齋藤忠著作選集5)、雄山閣出版}
- 網干善教 2000^{『佛教考古學研究』角川書店}
- 坂詰秀一 2000^{『仏教考古學の構想 その視点と展開』雄山閣出版}
- 坂詰秀一編 2003^{『仏教考古學事典』雄山閣出版}
- 文化廳文化財部記念物課 2013^{『發掘調査のてびき - 各種遺跡調査編 - 』}